



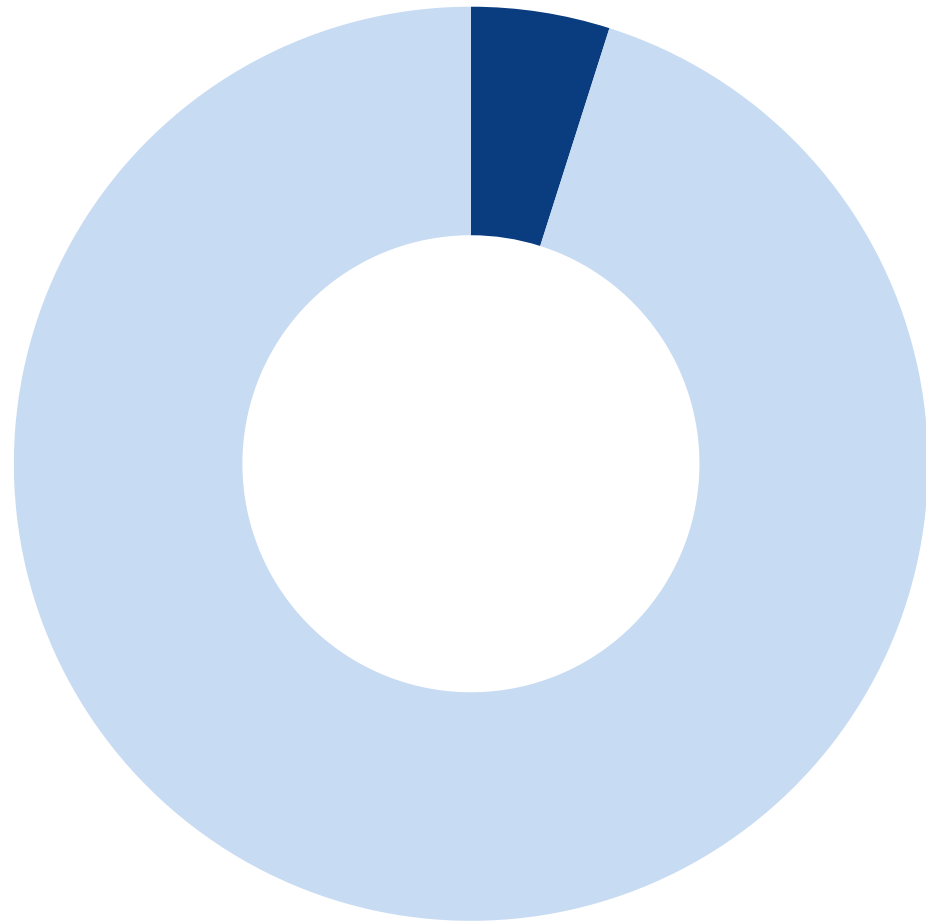
Silent Signal Tokyo

——沈黙格差レーダー——

相談できない子供を、可視化する東京へ

聖学院高校2年 神崎一真 五井泰地 伊藤史温 沼尻祥宏

4.9%



落ち込んだ時
誰にも相談しようと思わない10～14歳の子供
(こども家庭庁)



解決しないと思う



知られたくない



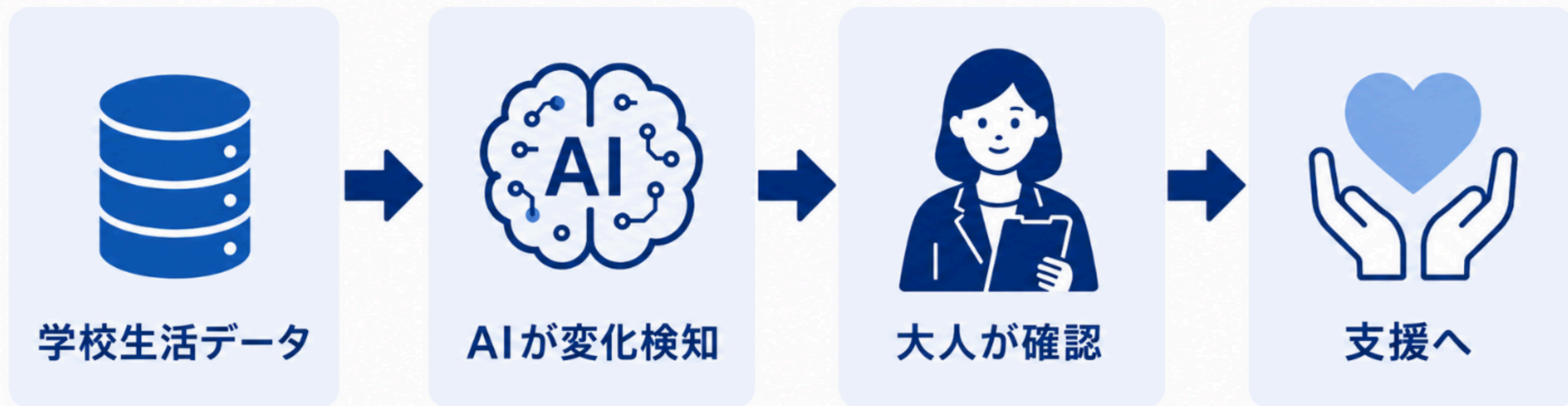
うまく説明できない

困っているのに 相談しない子どもたちが、存在する



相談できた子だけが、制度の中で見える

相談前の小さな変化を支援に



AIが発見 大人が支援へつなぐ

Silent Signal Tokyo

子ども支援の沈黙格差を解消するAIシステム

沈黙サイン検知

3名の生徒が沈黙サインを示しています。詳細を確認してください。

最終更新: 2026年5月3日 14:00

主要指標

高リスク生徒

3名

全30名中

平均相談回数

2.1回

今月

未支援率

15%

改善中

クイックアクション

生徒一覧

全生徒の詳細データを確認



23区ヒートマップ

地域別の沈黙格差を可視化



管理職レポート

統計データとプレビューを表示



推奨アクション

田中さんへ:「最近、課題の提出が少し減ってるみたいだけど、何か困ってることはない?気軽に相談してね。」

システム情報

最終更新
検知エンジン
データ同期

2026年5月3日 14:00

v2.1.0

同期完了

← 戻る

生徒一覧

フィルター

リスク

すべて

高

中

低

沈黙サイン

すべて

検知あり

検知なし

学年

すべて

1年

2年

10名の生徒

渡辺健太

2年B組

高リスク

沈黙サイン検知

出席率

70%

提出率

65%

平均スコア

60点

詳細を表示 →

山田翔太

2年C組

高リスク

沈黙サイン検知

出席率

65%

提出率

60%

平均スコア

55点

詳細を表示 →

高橋由紀

1年A組

高リスク

沈黙サイン検知

出席率

72%

提出率

68%

平均スコア

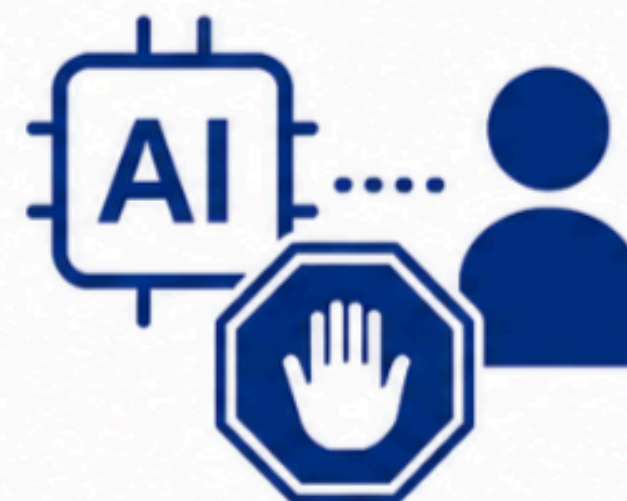
62点



AIは診断しない



成績評価に使わない



AI単独判断禁止



最終判断は人間

使用する



出欠



課題提出



記述量

使用しない



病歴



思想信条



家庭監視

実現方法と効果測定



“支援未接続リスク”中心の行政へ。

生徒



- ✓ 孤立の早期発見
- ✓ 支援につながる
- ✓ 安心感の向上

学校



- ✓ 見落とし減少
- ✓ 優先順位整理
- ✓ 連携改善

東京



- ✓ 沈黙格差マップ
- ✓ 重点配置
- ✓ 9月問題対策

言えなくとも見逃さない

見えにくい困りごとに近づく社会へ



Silent Signal Tokyo

1



Silent Signal Tokyo
沈黙格差レーダー

Silent Signal Tokyo

沈黙格差レーダー

相談件数を疑え。相談できない子どもを可視化する東京へ

言えなくても、見逃さない。

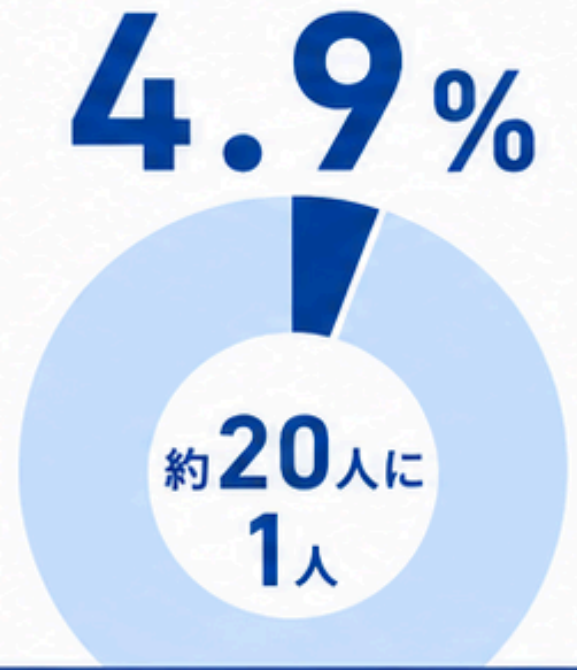
聖学院高校 2年 神崎 一真 五井 泰地 伊藤 史温 沼尻 祥宏

現状 | 『相談できない子』が存在する





データが示す、見えにくい“沈黙格差”の実態

誰にも相談しようと思わない子どもがいる


気分が落ち込んだときに
『誰にも相談したり、助けてもらったり
しようと思わない』10~14歳



相談しようと思わない理由（上位）

-  相談しても
解決できないと思うから **42.7%**
-  自分ひとりで
解決すべきだと思
うから **38.7%**
-  誰にも
知られたくない
ことだから **38.7%**
-  相手にうまく
伝えられないから **33.3%**


子どもたちの相談窓口は
多様化しています



電話相談
電話でつながる



SNS相談
チャットで気軽に相談



相談窓口
学校・地域の窓口など

相談件数 = 『相談できた人数』 → 相談件数 ≠ 困っている子どもの総数



なぜ『沈黙格差』が起きるのか

相談したくても、できない子どもがいる現実


現在の支援構造



「相談できた子」しか支援につながらない

しかし、実際は…

相談したくても、できない理由

- 1  人に話せない・話しづらい
うまく言葉にできない、誰に話せばいいかわからない
- 2  自分でも整理できない
何がつらいのか、よくわからない
- 3  知られたくない
周りに知られることへの不安や恥ずかしさ
- 4  相談しても変わらないと思ってしまう
過去の経験から「どうせ無理」と感じる
- 5  自分ひとりで解決すべきだと思う
迷惑をかけたくない、弱音を吐けない

教員側の課題



見える範囲が広い
1クラスあたり約35人※
一人ひとりの状況を
継続的に把握するのは困難



課題が多様
不登校・家庭・学業・
人間関係など、課題が多岐
にわたり、専門対応が必要



静かな変化は見えにくい
表情・言動・行動の小さな
変化は日常の中で埋もれる

※文部科学省「学校基本調査（令和4年度）」より



相談前の「見えにくい変化」を見つける仕組みが不足している

学校生活データの“変化”をAIが検知し、支援が必要な子に大人が早く気づく仕組み

活用する学校生活データ（例）



出欠・遅刻

欠席数や遅刻
遅刻の傾向



課題提出

提出率の低下/
未提出の増加



記述量

書ける字数や
文章量減少



進路希望

未設定・変更の
増加



アンケート

回答内容・頻度
の変化

対象（ターゲット）



主な対象：都内の中高生

支援の手間を負担をしながらも、
自信回復につながらない小さな変化・
心の違和感・家庭・経済・健康・
孤立・心理的な領域など



支援する大人たち：

教員・スクールカウンセラー・
外部相談員・教育委員会



他人との比較ではなく、その子自身の過去と比較する



学校生活データ



AIが変化を検知



支援確認サイン



大人が確認・声かけ・
支援へ接続

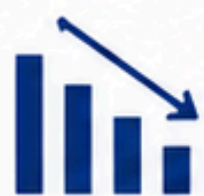


ポイント：『診断・評価』ではなく、『気づき』と『支援接続』を支援

データの変化をAIが検知し、支援につなげる



AIが提示するサインの例



活動量の低下

- ・ 提出物の減少
- ・ 出席の変化など



継続的な変化

- ・ 連続する変化
- ・ 持続性を重視



変化の組み合わせ

- ・ 複数の要素が重なるサイン

生徒に配慮する声かけ例



最近、少し忙しそうだけど、無理していないかな？



何かあったら、いつでも話せるよ。



最近、ちょっと様子が気になっていて、声をかけた。話してもいい？

大切にする姿勢



責めない



決めつけない



本人のペースを尊重

データとAIで「気づく」 → 人が「つながる」 → 子どもが「安心できる」支援へ

—— 「相談DX」ではなく、未接続の子どもに支援を届ける「支援接続庫DX」へ ——

従来の支援（現状）



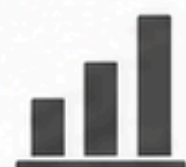
相談待ち

子どもが相談するのを待つ受け身の仕組み



受け身の把握

相談や通報に来た子からの対応が中心



相談できた子に偏る

顕在化した子どもへの支援に偏る



個別最適化が難しい

個々の状況を広く把握し、見通しが難しい



件数中心

相談件数・対応件数を中心に評価



本提案 | Silent Signal Tokyo



変化の検知

データの小さな変化から、早期に気づく



相談前の気づき

相談前のサイン・環境要因まで、広く早く把握



未接続リスク把握

未接続（つながっていない）子どもを可視化



AIが気づきを補助

AIが要因抽出・分析・優先順位づけを支援



データで学校・地域を支える

根拠データで方針・予算・実行を支援し、支援が循環

「相談待ち」から、「気づき」と「支援接続」へ

倫理・プライバシーへの徹底配慮

——— 子どもの権利を最優先に、信頼される仕組みとして運用する ———



AIは支援のきっかけをつくる補助であり、最終判断は必ず人が行います。

子どもの尊厳と権利を守るため、以下の原則を徹底します。

1. データの厳重管理



- 匿名化・暗号化を徹底
- アクセス権限を最小化
- 保存期間・目的外利用の禁止
- 外部提供の制限と合意管理

2. 不利益利用の禁止



- 成績評価・進路選別に利用しない
- 広告や営業・営利の目的で使わない
- 差別・不当な不利益を招く使わない
- 子どもに不利益を生じさせない

3. 人間による判断



- AIが「気づきの補助」に限定
- 最終判断は教員・専門職が実施
- 複数の視点で確認する体制を確保
- 支援方針は対話を通じて決定

4. 本人・保護者の同意



- 利用目的を丁寧に説明
- 本人・保護者の同意を取得
- いつでも同意の撤回が可能
- 定期的に運用状況を公開



子どもの権利を守ることが、支援の効果を高め、社会の信頼につながる。

私たちは、透明性と説明責任を大切に、子ども・保護者・学校・地域が安心して協力できる仕組みを目指します。

—— 段階的に実証・拡大し、持続可能な仕組みとして東京全体へ ——

2026年度

実証フェーズ

対象を絞って検証・改善



- 対象校5～10校
- データ収集・モデル検証
- 運用フロー検証



目標：現場での有効性検証と
運用基盤の確立

2027年度

拡大フェーズ

対象校・地域を拡大



- 対象校拡大
- 関係機関連携強化
- AI機能改善



目標：支援の質と効率を高め、
持続可能な体制を強化

2028年度以降

都内全域展開フェーズ

東京全体での運用へ



- 都内公立校へ本格展開
- データに基づく政策改善
- 持続可能な運用体制



目標：誰一人取りこぼさない、
支援のインフラへ



段階的な実装と改善を通じて、すべての子どもが必要な支援につながる社会を実現する。

期待される効果・成功指標

子ども・学校・行政にそれぞれの変化を生み出す

子どもへの効果



- 早期発見・早期支援につながる
- 孤立や深刻化を防ぐ
- 安心して相談しやすくなる

学校への効果



- 見守りの質向上
- 支援優先度がつけやすくなる
- 情報共有しやすい

行政への効果



- 相談未接続リスクの可視化
- 支援資源の重点配置
- 政策改善への活用

成功指標（KPI例）

	支援接続までの時間	
	未接続リスク把握件数	
	相談・支援接続率	
	教員の見守り負担感	
	生徒・保護者満足度	



一人ひとりの『気づき』が、子どもたちの未来を変える。

まとめ | 言えなくても、見逃さない

—— Silent Signal Tokyoが目指すもの ——

相談できる子だけを支援する東京から、
言えない子にも近づく東京へ。

1

支援の起点を
「相談待ち」から「気づき」へ



見えない変化を可視化し、
早期発見につなげることで、
SOSを出す前の子どもにも
支援の手を届けます。

2

AIは診断ではなく、
支援接続の補助へ



人の判断を支え、
適切な専門的支援へ
つなげることを目指します。

3

声を上げられない子にも
近づく東京へ



すべての子どもが安心して
学べる環境をつくり、
誰一人取り残さない社会を実現します。

支援は、声を上げられる人だけのものではない。

Silent Signal Tokyoは、データとAIの力で「見えない子に、支援を届ける」未来を切り拓きます。

参考文献

- こども家庭庁「こどもの悩みに寄り添える社会に向けて(中間報告)」
- 内閣府「教員1人あたりの生徒数（公立中学校）（2024年）（全国）」
- 文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（令和6年度）」

※本スライドの情報は一般的な公的資料に基づくものであり、特定の個人・団体を対象とするものではありません。